

句

靈

寶

911.3

7

句靈寶



白雲寶

秋草乃花名新がしり露で念と虫入
とて死とて病あつたは又因の中も
終り書とて筆力を及りて是は探題
とて句と紙ふる物なり

業

露月

花をんて地の香をゆく葉

和納堂

菴五

葛の花

回極人々宿ひたをよれ葛の花

旭志

病草

花ゆ葉やう草とて葉の爪乃如

琴風

秋草乃花色がけりし露を念之出入
とて死とて病ありわはぬ園ゆゑに
終ひ書とも筆力を及りて是は探題
とて句を紙ふる物なり

棠

露月

花をんて地の香をゆく棠

知納堂

蒼玉

葛の花

四物人々宿の夜をさる葛の花

旭志

葛の花

浅ゆ葉やうゆとささの爪乃如

琴風

蓮の宝苑

蓮の宝苑に花の宝苑に七何國歌

蓼乃花

濱松の漁夫の隣や蓼の花

源氏草

つらね草の葉の思入源氏草

茶師草

溜璃乃手や茶師草

藍乃花

瓶役の女房の毛刀や藍の花

和賦

露洲

標梅

八木

木昌

藜藿

時とてや誰か花を八柱風

金剛草

桑坂乃足は草のてこはつ花

箭頭草

かむぎ草の殺はつてとまひ花

通草

長くすふ口城の草のてまひ花

龍胆草

山鳥の草の葉のてまひ花

雄五

松羅

潜之

楓分

折中

地榆

何西のまのりもきくもことなり

龍之

百夜草

淡繒や垢離かく場の百夜草

岷平

萩

翠の簾越しは採りては萩の風

立梅

鳥甲

萩のたふ敷浴を恥うか櫻

柳條

物さ草

物さ草は物白小孩のまのり草

以翠

蕪草

板井筒より小炭ありうら草

派十

かんたん豆

隈え小名遊て今や豆石湯つ

音雪

志津草

江戸湯や家苑導引菊さく

丁風

萩乃花

也萩や躰はまきり雨の勝

風石

菱草

菱草は白の煙より紫顔哉

艶女

心る字

思ひ茅野々や園乃出之見

千秋

野菊

秋の草や才楠てとく金目栗

蒲 出口

葛

優婆塞う道挑灯や香紅紫

蟬話

花紫

檢校やむむしう所兒乃茶衣

秀圃

朔類

橙やとけりか歌く 不流蔓

露月

紫鶏頭

思ふまありては白と

作の真経法てん徳と解

おのろ多分思ひあはるも紫鶏頭

梅戸

水のたけしん分のほろと白

貫十

おのろ多分思ひあはるも紫鶏頭

湖十

二斗焚入鍋とびな祝れ

花十

割り立 吾れ且も落法は光

負之

心の奥合あはる粉中肉

荷十

芭蕉

唐人乃舞妓は是き歌を色紙哉

百里

中渡所觸之德乃御之邪
解食之際之孫并去婦等
爾井翁下女之長行徳等
千蓋氏之孫子世徳家之孫

加

待音尔終孫、幸兒小五哉

尚是云、かゝりては

以子有馬丈、以飲飯下

名有虫小吹有、袖子散

子同之同一支書、唐裁

漱十
千秋
東龍
露月

千寅

全

十行

璋定

紅葉

小倉山家旅乃中より此の如く

暮翠

出

織りこ文行声や織りこ

白雲

廻文

松葉自有是後山光の深き

如陽

甚

此の如くはと梅の枝葉の下葉は

松羅

世の如くは満ちて海にさかす

舉夕

雨たると絶えたるうき世の如く

扇車

千段の川胸と襟乃縫う所

湫十

か帯合ふ跡の隙をきぬか

千秋

筒井筒下女う長行ハ信

東龍

千色ははるまの世は世の落

露月

月

待音小浪路ハを兒小五哉

十寅

尚星くからかまは

りよの月馬まか波飲坂の下

今

名月や虫小波多袖子敷

十竹

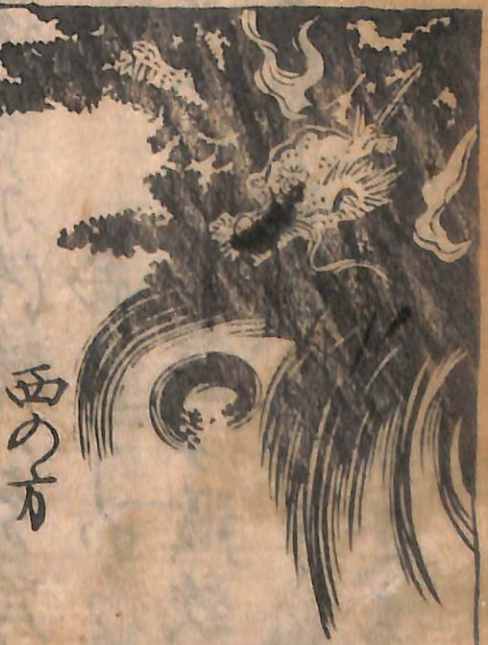
いふ日や同じまき書ハ落葉

璋也

名月

名月やまの田毎乃看川岸
屏れ角磨砥の事一々名月
くあつて悪い物あ一々名
富士鏡波うそとち月の仁玉門
名月や米れ食喰く寝松風
名月子星れ沙汰あ一々名月
出興乃小味嗜とたぐ月と膏
くあつて名月蛤まてと暑衣箱
なしといふ富士城登を以月尺

岷 文 野 以 不 光 東 紫 才
岷 文 野 以 不 光 東 紫 才
岷 文 野 以 不 撰 良 奄 紋 取



西の方

継純子禪ハ竜の威勢哉

秀圃

東の方

関九ハ虎と云ふ小を畫かむ哉

紫雪

上列前橋住仙舟



上

三

名月

名月やまの田毎乃看川家
屏れ角磨砥か帯一々名月
くあ月悪い物あ一々の名
富士鏡波をそと月のに玉門
名月や米れ食食く寝松風
名月子星れ沙汰あ一々の川
出興乃小味嗜をたう月と膏
くふの月蛤まてと畧衣箱
なしといふ富士城峯をとい月尺

岷吟
文十
野全
以翠
不撰
光良
東竜
紫紋
才鳳

名月や登入ハ雲を散りよと

季凡

今昔の照臨をくくも與橋七

面白れぬ乃袂霧亦きりや三又の言

延幽

名月や言ふものハ秋の不三

梅戸

こよひ照れ有ハ古殿の暮也

露月

三又夜

燒半紙掃強ハ月乃桂う那

山又

名月や下和ハ鳥鹿ハ極きり

一漁

喘く毛の牛ハ陽ハ月

佳風

宵う絲ハ名月の古ホあう

湖十

享保己中秋

東籬

表八句

公達乃香紙いやとハ菊茵

兼皎

五位を飛らうちのむく鳥

琴風

糸竹此曲おはらた老うきく

沾旭

笑るるあ合の色かりりり

百里

年毎乃水あそめ菊ハ櫻櫻

素丸

舊尾市くハ村の念別

露月

角力と重ハ月朔月帯と帯て

湖十

あへく配着ハ鶴あも作等

旗

菌

初茸や小人の釜み餅く糺合

物食乃常や惣く復茸

茸時の眩やまらふそ山法師

ちるたハ掃ッたきらるる菌山

とらるる千神佛せト活狩

柑乳

洪神や吃ドの肉於とりひてう

部を持の朔みまらる抽味嚙哉

所の木や一樹の陰の抽味嚙哉

山玉

活旭

竹意

素丸

白雲

耕枝

竹意

和歌

菊

菊やまきく花を香あり酒の色
周尺のぬとこ落子こころは菊
籬菊を顔珠実れ花やう那
梅のや産衣のたけりき花菊

後乃月

運橋し事小は 十と 夜
香臭の所走小似きう夜の月
先迎し一馬う孫の自小後れ月
帆落く秋のあきぬの十と夜

越光 暮

暮琴

雷雪

凉巴

如蒿

凉巴

山夕

湖十

菊

初芽や小人のまゝ細く似合
菊食乃常や悠とく復芽
芽時の眩やまらうまを山法師
ちる花ハ掃つたあうらう菊山
とらなりし千種佛せし活特

柑乳

供持や吃の因於とりのてり
部を持の納りまきる柚味晴哉
神の本や一樹の陰の柚味晴哉

山玉

沾旭

竹意

素丸

白雲

榊枝

竹意

和歌

十三夜

草花ぬきのあはれなれども
羊乳子乃ね助及まけ取れを言が
いり七揃き逢て我意とほの月
市市帯の尻八まの月う返の月
芳野の乳婦ふまの乳十三夜
返の月東城空蝶乃めん
娘袖ふ餘の布や後乃月
塚下地味暗の歯とちの返の月
川魚をよむる名とあり後の月

湖仙 和賤 周本 素秋 金塊 八木 楓谷 素 出口 扇車 琴風

七夜

柚の釜神高神の心も
落葉や菊進出とありて吹
ひ死枝の心の蜜柑の実は
糖作の柚の福を照して出
逢うは折して手回す神

重九

立己くの葉を埋もや菊の刺
老きぬや菊の心は花若子
白妙乃神を刺しもの心
引的や香気吐く菊の拍子合

全 浦 金 堀
露 東 里 仲 水 月

湖 琴 百 白 湖
十 風 里 雲 十

廿三夜

廿三夜

草老ぬ月の影はたなを
羊れ子乃枝^{曲及}まけ射
いりて煙を透て飛意と
月も草の尻はまの影
芳の風舞ふまの影
枝の月影は空蝶乃
撥神不餘の布や後乃
塚下地味暗の影
川魚をよむる名を

湖 和 素 金 八 楓 出 扇 琴
仙 賤 秋 堀 木 谷 口 車 風

重陽

桐葉之九日始 力州
 雲葉之九日始 五の藤
 天秤之九日始 三の菊
 笑之九日始 三の心
 春之九日始 平葉乃秋
 桐獨此菊力之 五の心
 丹頂の日向 菊の心
 凡先并葉之九日始 菊の心
 此は菊の香 菊の心

山夕
 一漁
 楓谷
 貫十
 来雅
 芭鷄
 岷畔
 如蝶
 蕉雨

菊は心葉の九日始
 流の九日始 三の心
 煙葉の九日始 菊の心
 菊桶の九日始 菊の心
 一穂の九日始 菊の心
 世の九日始 菊の心
 秋の九日始 菊の心
 母の九日始 菊の心
 好の九日始 菊の心
 笑の九日始 菊の心

里仙
 琴色
 子蜂
 丁谷
 芦人
 出紫
 楓手
 訥子
 桃朝
 露月

後志月

盛飾の同装束を乃才と我
瓦注み自とよむ月の土俵赤
まねあひく芋やのりお菓子燃燭
又どてる佛の教や友乃月
内裏のも仕談よふ 十一之夜
女房のへききかゆ 此十一夜
花と実と新中形をすそ夜
尺幅と縫きりふらうと良月
綿ちる川や小穿し 後の月

白雲 里仙 大梅 十丈 豈四 来雅 如蝶 野全 派十

醉市をそそふ別とは後の月
美阿女浅美色はく 後の月
水揚や杖小世話と衣かひ地
浦鳴み手さひき市せ我衣被き
如あふれ君八端の歩はる月

回文

先きのきののちりしはれ有むの

徐来

菊

娘しはの袖小重きく葉の寸
望らるまて疑はれくう一を菊

六葉 松井

三千九百後の氣性其菊作
吾何一の研元其の也菊蘇
以の書之字探其美語筆哉
智恵の海に波美は其の菊合
大津繪之菊は其の衣の元

如見
東竜
秀圃
雄玉
千寅

今朝の秋は其の形も其の

草も其の本も其の九月九月
秋形も其の也其の也其の
落葉は其の衣も其の也野菊
佐藤子菊の髪玉は其の也

至深
會津
左
牛備
大磨
一
山
十
立
九

山に其の也其の也其の也
其の也其の也其の也

其の也其の也其の也其の也
其の也其の也其の也

待
心

其の也其の也其の也其の也
其の也其の也其の也其の也

全
山

其の也其の也其の也其の也
其の也其の也其の也其の也

物も其の也其の也其の也其の也
其の也其の也其の也其の也

橋
立
秀圃

九口戸所くは商人小詰くは職人
侯方の頼所の位下を求て探せよと
る

本町呉服屋

刺とうや襦の目鷹の目友中鳥

木呂

本町染物屋

刺まきぬ内う本草花野うぬ

派十

本町紙屋

暖簾のるるのるみ子紙糊丸

潜之

大徳馬所本物屋

本物の手くら紙梨の歯高りや

折巾

菌

茸特や和尚匂海丸あげ皺

雄玉

松茸や秋又坂東苔むし海

扇車

南のひ子小窓ふ心地とれ菌粘

音雪

水乃雨貯けふ寺乃こころ那

派十

飯ふくお口舌の種や早松茸

里仲

雨の白ハ紅茸特や赤口き重

東水

松高しいよくむむ菌火う

千露

袖襦袢引うは味う菌守り

千魚

茸並小娘の病氣見守りきう

露月

丸口戸開くは高人小路くは職人
侯方の穢所の位下を求て探せり

中町菅服屋

刺とうや糖の目鷹の目友中島

木呂

中町桑袴屋

刺まきぬ内うが草花野うね

派十

中町紙屋

暖簾なるる露のるみ子紙糊丸

潜之

大徳馬町老物屋

老物の手くら紙梨の歯高りや

折巾

小傳馬町旅籠屋

新宣沙門町の西へ一長踏

岷翠

西替町全殿

全殿の意はつたやまの仙苑

以翠

瀬戸物町子物屋

松茸やきわしし紫の島夜塩

和殿

大弘町菘菜屋

牛馬れき店や梅とかいひよる

標梅

堀江町雜穀問屋

軒古〜西の外小菘菜屋

百里

大傳馬町栗葉屋

讓河弘符白子ゆゑしきま乃筆

艶女

通油町系紙屋

淮虚云の時取来小くし系紙賣

露洲

横山町出取銀作

出取子や提之取声とすうとすう

秀圃

本石町桶屋

大道へ糸葉切門ち取海へ鉈

雄五

本石町草足袋屋

撞止て大坂杭乃草足袋屋

安里

小傳馬町旅籠屋

新宣所門壁の海くくよ一取階

岷翠

西替町全銀

全銀の巻はつたやまゆ仏花

以翠

瀬戸物町子物屋

松茸や喜あしし紫丸高夜塩

和賤

大弘町藤草屋

牛馬れき店や梅とかりのり

標梅

堀江町雜穀問屋

軒古しよの外小蕎麦花

百里

田平町たたら屋

あたたかしの端落かた暖簾

千秋

橋町あまご入

あつちや茶とあつちや入

何処

富沢町たたら屋

あつちや綴りあつちや入

音雲

亀井町炭焼

あつちやあつちや入

翠々

岩井町桐油屋

あつちやあつちや入

梅枝

永富町お物店 野原のいほも多

親抱く親を強ゆる種午房

佳風

須田町水菓屋

あつちや水とあつちや入

如蝶

池の端あつちや入

蓮の実あつちや入

芦人

浅草町張子屋

あつちやあつちや入

延歯

浅草町花宿

あつちやあつちや入

露月

通り町細物屋

小石物の曼花あらし法師衣者

東龍

芝檜の心者

角物の幾何ぐまのこころ

季風

大芝の車備

牛病や軒のめくられ車百合

八木

長坂元結

人き武士扇をひきめ元結除

如陽

沼川具利

力其妻や蛸剥町を流す

鳳石

綱

兩國橋の菜市

あま業く耳小衆あり鴨の香

好夕

新川酒造

河風や荒の窓より難波の香

蟬詐

長谷鳩居戸物屋

鳥糞や入目此事兒血砂疥

楓谷

靈岩湯丸を屋

朔夜や籠乃舌搔く擗り丸を

貫十

鉄炮洲志本屋

仙人の手代柳りきり吾れ志本

可翁

通り町細物屋

小石物の夏衣あらし法師着

東龍

芝橋の心衣

鮎物の袋ほぐまのこゝろ

季風

大芝の車傭

牛蒡や乾のめくられ車百合

八木

長坂元結

人を武士扇をひきの元結除

如陽

沼川貝刺

月夜や蛎刺町を流る石

鳳石

河川于瀬底

是と申すもつて于瀬場の夕時云

龜筋

佃細引

細引して佃見せりりおる月

琴風

雜秋

我心穢然ぬげきり月乃名

扇堂
風七

夕葉れきん海を思ひあつて

物于小園の度きり白桔梗

涼巴

名を切りそ神木を愛せり鳴

立圃

松虫母山哉汝をば鳥居哉

全
沽圃

名月

平窟ハ杉津若ハ橋為所名物也

見たり多ん平窟津若と名月

露沾

名月や十里九里海大廣間

芳津

露ハ杉津若の傘や月今昔

野渡

湯氣散れ雨柄袋まよ月

沽薄

小使と淫あり月の高き平

立圃

月葉の影をさす此のまきぬ

沽板

書たり雨妙りききは

火撥呼月のみ天と名月

露沾

名目

平窟八柄非若八柄五所名物

刃傳く多ん平窟非若八柄五所名物

露沾

名目や十里九里海又廣間

芳津

羅八柄非若八柄五所名物

野渡

湯氣踐乾雨柄袋まよ月

沾薄

小便と淫あり月の高き平

立圃

月葉に踏ると平此のまよ月

沾板

書より雨妙し書きは

火撥呼月のみ天古き

露沾

秘を言行を成仰く如斯く如く
是をいふに百の千に是を傳へ
こもは成りて其れ及ぶ所あり
海を渡りて其れ及ぶ所あり
郭を菊の乃佳句をまゝに成り
功を記す如く如く如く如く
雄を獲りて如く

享保己季秋

天竺の靈文ハ如くハ唐古我國ハ書
如くハ賦以真雅頌多の姿成り
人の心を如く如く如く如く
等しく代りて是を如く如く
如く如く如く如く如く如く
如く如く如く如く如く如く
如く如く如く如く如く如く
如く如く如く如く如く如く

晋子ら親以かきしと是皆時のゆほ
 あらとや依えし露月は白集と撰の
 ことさうゆひ世に流るる事と去来れ
 其も相云の役者きりしと又あまを
 かきしきし見たりしとよを面張出の

中受

朱重舟
 立圃


冬錦

表八句

望^{帯振}あは入白城也
 戈ハとて多は
 抱へ地子瘡の毒命は後君也
 覓乃ほりハ砂おぢり自
 蒙来と鳴くハ茶人乃下男
 酒飲ぬのこそ茶の小名知
 手に雲は月の影すも頼り
 秋風金示りけり秋風若く坊

豊屋人
 如萬

白雲
 沾那
 如珪
 湖仙
 帆谷
 百里
 露月

時雨

附西より鹿の起り新母帯
しれ岡をさ唐乃りて去
うた雲の口舌多ひや初時雨
鼻紙へ時雨後思ふ東海子

越前山玉
暮琴

全
風丈

玄猪

子孫とて実珠紙揃いのこ哉
子孫者不狂のこや並ふ空の株

蒼玉
竹意

冬かま

樽酒乃奥ゆりし炭冬かま

如蒿

小窓を菊馬了そいふを掃へ
切張や虫の振舞をかまへ
陰徳紙用しは邪やを掃へ

治郎
京巴
東水

時雨

一刷乃墨絵や鳥羽の付る
松の外友れとほりた時雨
片付ぬ六脚友ハ夕日邪
又秋小時雨の窓や片眼鏡
名代の蔓やきくく大松庭
辭段小十秋よや小時雨

富雪
湖十
佳風
和賤
素秋
嘯月

葉落ふ心家や〜れ兼れ
名ど〜は〜〜や神〜

落葉

圍くへ湯本れ日〜れ落葉
光陰の矢れ好ふき山落葉哉
何は空もふ落葉言〜女人堂
断切の〜落葉れ上乃落葉哉
舟入りや多〜尼落葉れ物給
耳古〜雨は〜朝の落葉持
竿と切り跡〜ぬ糸小落葉哉

梅枝
如珪

越前
暮琴

竹意

凉巴

琴風

白雲

和賤

楓谷

瓶より落葉の信は山路ふ
小倉市〜落葉あり橋の家

時雨

らんがくの片側あ〜く時雨
菫芝小段〜深秋事〜れ
念佛の金糸糸〜れや人と又
引窓れ時雨〜きれて焼豆腐
淋〜はは猿首の鷲の時雨
閑多る宿を江戸中〜れ
牛馬まで里城志事とや山寺

施玉
百里

琴風

八木

標梅

潜之

米雅

木昌

堂四

阿見の山
あまみ山
え

あはとう又隣子もきたる初時
時を為の程くまや十一之里
りよとまの思案の外れく
常夜の中よりおのり
しねおとる小節鳥れ声
彼より時をたてや法自發
先板あはふく女房時系
青の西片陽原ふり
合はふ念併の声を遠時
石のしむ時をともや一心院

菖蒲 里洲 常手 寫崎 六葉 松井 秀波 芦人 葛巴 折巾

所はる格別れあそく
信濃者山よりおのり
手はくく時を強羅の湖の

雄公 露月 白雲

鳥を探題

田島

足後きば田島を深する

岫峯堂 秀玉

錦鶏

錦鶏乃羽こぼると月の落葉哉

湖仙

鷹

あはとう又隣子もきたる初時

琴風

百子鳥

花がらけ女あかしく百らう

秀圃

雉子

鳥羽玉乃窟まはや雉子れ唯羽

蟬話

駒鳥

西貝れこ鳥うたへ於鹿山

以翠

白鳥

大内の花の貝んんり合を

好夕

燕

引足とま帰遊く行燕ふ那

折巾

水鶏

菟抽採じ僧まれ嫁のふいぶ哉

旅十

鶴

友呼や笑う拍子木鶴の声

露洲

山鳥

市とたをや山鳥の尾を公家の裾を

露月

撫

灯を消や物の咽出うらむ裏面

米雅

木兔

木兔や物くまも

百里

車僧

百女鳥

かしく紫の多みじとよと鶯の色

素丸

同

菖鷹や雇とれ鶯の夕侍ひ

出口

緑眼四

伝法とれ六位宿世やわつ海押

標梅

翠雀

美しん藤とはあふあふは鶯

雄

鶯鶯

きんまのやと侍誓の枕え

龜之雨

百十雀

みゆらや姫終つして松の竹

子蜂

啄鳥

落葉あり仲るるのまじ殿一方

志深

山雀

手小ゆきと石小候祇女兒利胡柳

琴色

鶉

元よ鳥と唐韻帯りたのね

芦心

畫眉鳥

綿服のほろきつるや八切子

安里

鳥の事
の事

鴨

五ノ河東鴨乃為水鳥也

如陽

鷹

海濱多見之負其重也

徐來

雁

其行如雁之序也

千秋

鷺

水濱多見之羽也

東竜

鷺

近利乃霜也

風石

軍鶏

其行如軍之勢也

木昌

雉

二寸余其行如城也

銀里

鶴

其行如鶴之步也

八木

鶻

龍宮其行如龍也

潛之

鴨

其行如鴨之步也

扇車

鴛鴦

一川翠水一川紅藕

鳴

鴛鴦持八巨燧小舟の如きもの也

家鴛

若比は清少と驚くぬあはれ哉

衡

首尾何や指の小川の女らさう

後一場瓜園より先ふ子鳥哉

鶯節ハ編くこそあはれ女子鳥

楓分

艶女

音

前立

生計

豈回

落葉

落葉の葉を尖く鬼の牙

落葉の如く乃隣の 甲

落葉又指を以てむら

如の葉や木の葉如く芝居色

翠の言は雨とさやけ落葉子

山彦ハ鹿矢敵く木の葉哉

時雨

誰か海路より経て時雨身居船

海面や待り去るく平目端

落

東水

春夕

季風

如見

艶女

露日

貫十

出葉

巨鼠不入を歌吹の耳へ夕射ぬ
 酔醒や備後^{ミナ}中へゆくはれ
 時或う如さまやゆふき銘の傘
 ねむりゆく浅し昔高き時或か
 又いひあふやう浅れぬはゆ
 連し春や河小橋きりてはれ
 若夜家の千洛ハ茅屋の時或
 小出五尼の時或てくる杖うゆ

湯嶋天神不^レ詣^ク

足利病きははは然一目的時或哉

巨鼠
 帝窟
 大梅
 李風
 計志
 野全
 紫紋
 不撰

秀圃

奥羽の傘松帯きりて傘不^レ夢^ク也
 傘松や松不^レ栢渡りのじり時雨
 神身月はる浅茅茅亦あそひ終泉寺
 乃亭也盃成めりて〜〜

初冬や松ふらりて死日のしに
 市に瓦波ある響の際きり
 きりあきは飄ふぬの衣さまりて
 心弦かけよとや標干れ尺
 幾やう風のぬけきる月のまへ
 まは掃つらんまのむすし標

湖十

左十
 支山
 待心
 一比
 標立

保のうらも声の緩めは海鳥
 とう遠くはるもさかしの雪
 雪津の中ゆくは此標で平
 穀地の飛の情ら一云
 待借取ふのよきなり 積あり
 乳^名 湖の釘を世のきまらて
 似て似ぬと呼其しるるは指を片
 ちよは事の情きふとらふら
 悔りあるを恥とせよ力の終
 中^雀 花糊や尋しのさし

穢夕 万全 左十 湖十 杉此 在此 万全 穢夕

橋を八橋と行花の原し道

名

満くまきなる 二條の心化

怪我をたて子城押をそがら集

蛸の地乃髪ぬらきれ

せる声の管くま周れ片底

久しく成ぬ交殺射てより

比里宿ハくぬふ氷川大の神

沈や磨き音ハ物ハ涙もあれ

降れはとて念の盤乃橋一平

川狩の道刺 踏しく

穢夕 湖十 待必 走山 樗立 穢夕 左十 待必 湖十 樗立

仕組宿鶉以立於菟ひしご

暮小見藤一の彼家たいは

あしきる反叫し自れ尋のぼり

懺下行行行思徒む釋

蕙三られ八押小骨あり角我

縹形の蠟試娘 子侍小

子さるういさいされあぶらまの

おりさや又の折檻

感してハ虎の文字後苑の山

陽梅野桃じりまー乃垣

左十

支山

穢夕

待必

樗立

左十

支山

湖十

待必

樗立

沈灯守お花ひしご

紅葉見や一ひし西風揚ふ

村お葉系をそとめよ下侍屋

岩山然ふふは独歩まらま難り

麓へそそあま是くらぬ藤葉歌

侍乳がう所しおはるる藤葉をりそきんあんと

冬川やきさ下侍ありあ

急心ひし藤

弦高宗風能柳々々中ちし鞠ハ今々の

美人くく鞠おと経る杖清 不撰

待必

左十

樗立

支山

十月 淨名錄

花を又 會式一日より此山

雜考

稔のこぼる餅の毒後の印子
炉用や今より他出思ひ切
はく造り鼻の死物の火跡子
地の恩城部一宿きり津音
秋也ハ身ノ梅をど死あり津音
老の山見及家寄るを死了老
風小本根の鳥乃の知り耶

享保十七初冬

延満

浪十

蕉雨

紫紋

古夕

立圃

全

一漁

活代志をり

表八句

年くれ玄猪乃餅や之輪の祓
幣よりあぬ神了早毒
旅初ハ此れ短紀年知り
洗いし雨小麻あしり
鉄炮城現く見たりそこの者
世をゆりくく水漬小塩
籠ゆり男踏交れ更れ力
指を導く落のちり免

露沾

露月

杏英

琴風

立圃

沾梅

白雲

百里

子鳥

抱く妹を祝われてさういひさう

鴨

言砂れま婦成なり 巴鴨
初を持乃小鴨然ほそく禿う邪
意やを鴨れむの云末乃松
か留場や鴨の脂れ夜乃むら
市取ぬらん鴨の言れ行来ぬ
心あつらしくむあり鴨の比翼哉
内祝小鴨の行来や

一カ川カ子
柁

山鶴

沾 旭
幽 栗
暮 琴
和 賤
楓 谷
志 水
昔 花

の遠く巴をほくらん小鴨を

市取ま鴨首や羽ををほらん

鴨い小味喰や留神を海くれ

ナラケツと獲守る氣か鹿鴨の

英流いさう政府そゆく又行人

故身河の結の及影の車鴨

雲

競へんし言れむらぐ物業是

口言とほはり茂暖めカ言力が

眉掃の手さるるあきと柳の香

白雲

淵 十
楓 子
探 水

風 丈
涼 巴
梅 枝

二海風を死人の海に流す

氷

明鏡の玉子ほり金よる水
美女の記がくくさる氷
初氷と花葱をいりまはる
秋新秋をいり初氷
海川の道山へ鳴る氷
氷とは波音をいり
名と製くくしとゆは氷
君くく校をいり

一漁

山玉 治旭 富雪 凉巴 素丸 白雲 如佳

あしる糖の出る海より氷
氷あり中やと氷祥の期
裏城に於境々池の
氷割茶罐の由や床も
文行や柄投をこぼる二階
為氷去鋤賣り乃言
性悪のまうや海や氷
水記くく雑魚の凍る
淡洲の芥やあり氷
切海くぬ風も是あり

八木 潜之 蟬 霞友 藤枝 千露 探水 一月 露月 百里

浪
 波
 の



波 難

音雪貞

七将や難波の馬乃小くおほき
 糸物や幸あやふくみあり抱まき冬を
 床入を及の玉踏く并花の好
 主舞ハゴのちが出たきびり哉
 國厚一今城まきを筑後國
 忍月寺や古鼓て用く梅の咲
 文と好む仁許て形一垣乃毒
 舞嫁見物不きそく入難波寺
 梅う枝小市ほとや難波れ古鼓
 毛反色八好毒れゆくや此

百里 露洲 八木 音雪 木昌 来雅 志添 二周 折巾 好夕 露月

田村



音雲 貞

先ツ花の色で蹴倒と立居
 名紙とり弓張舞やと所中
 階石尾より花不頼地をれん
 鈴呼もぞと同年花の堂
 村立のや秋藤へ向ふ影を象
 舟竹も毛より市付けれ男あは
 智恵の矢不射物はさう鬼刺
 鬼乃目ふあまの強紀あれ哉
 舞しきまハ秋受や室の梅
 今もその香やあまさと年れ堂

白雲 如珪 里仙 安里 赤十 鳳石 千秋 東龍 子蟬 堂四

羽衣



音雪画

威しのまれ惚きぬん跡や花衣
 物もそへ、羽衣兒驚れ磯にひ
 幾年やあふ女、遠くき
 雲風小笠まればる秋まれ雲
 遍正を氣ふるさけり、雲うとこ
 通ひ路やこ保みあつてひのけり
 羽衣や抜けて物葉まのの君
 長湯してあつて、こまの羽衣鳥
 花曇虎の尾や踏、舞乃曲
 秋風の葉馬に流し、や銅音板

標 瀬
 滑 之
 楓 谷
 岷 平
 如 蝶
 如 陽
 野 全
 青 里
 琴 色
 雄 玉

空梅

傾城乃うしつぎ我々これ先
 廣めまぶ外戚乃兄や空の梅
 空れ毒窓うしつぎ是れ是れ

贈彦系係祝詞

空梅や松の壽哉主人男れ子

類見を

良見きや花も良とある宴の門
 類見せや乃らるる乃らるる
 見知うしつぎ良と初め

雷野
 右巴
 扉雀

延齒

挑雨
 雨舩
 梅先

空梅の
 類見



空梅
 類見

空梅

空梅
 類見

空梅
 類見

空梅
 類見

書名
句靈寶

享保十年

江戸板



千早振良ういののみを命針

治梅

面の隈む杯きはげやしく時面

全

時面くう八百を茶所敷酒手

扇車

官守れう海ももむやを如文

千魚

い浮海八懐小指と

月白く氷城鶴乃木うく魚

夫山

晋子雪江の白ありその形容紙

月の暈葱葉於此守小哉

柳葉
梨角

隅田川乃野後小每待形一海

見後きはたりふ旅人冬之笠

標立



